

あなたにとって演劇とは、  
そして、旭川市民劇場とは？  
一年を通して、見えてき  
たこと、感じたことを投稿  
いただきました。

# 2023 私の劇評

私は十月例会『へたくそな

字たち』を推したい

60代男性

この作品は、賛否分かれる芝居かもしれないが、私は「なぜこの芝居が良かったのか」について書いてみたい。テーマがくつきりと浮かび上がってくるような芝居だった。特にラストの場面が良かった。道郎さんの手紙を読む↓畑野先生が自分の思いを述べる↓それに対し弥生が「綺麗事言ってるんじゃないよ！」↓畑野先生が「うん、綺麗事だね。じゃあ最後の授業をしようか」↓「気持ち伝わらない時はどうしたらいい？」↓「それを 知りたいから 学校で学びたい」で結ぶ。観終わった後も余韻の残る場面だった。畑野先生を中心としながら、誰かが主人公というよりは、繰り広げられるいくつかのエピソードを通して、出演者皆が時には前に出てきた後ろに下がるという構成が上手いと思う。畑野先生(樋谷絵図芽)

の演技は、抑えながらも存在感があった。生徒一人一人の発言を否定せず受け入れ、寄り添っていく姿勢が良い。確かに、出演者全員が上手いとは言えないが、役に対する一生懸命さが伝わってきた。「学ぶ」ということの本質は、「知らないことを知る喜び」だと思いが、「学びの場」ということにいつも仲間がいるから学べるし、彼ら一人一人にとって「とても居心地の良い場所」だったはず。一人では学べないが、仲間がいるから学ぶことができたのだと思う。卒業にあたって、一人一人の生徒が得たものは何だったのか。各々が明確に答えられない描き方だったが、そのことで観客にいろいろと考えさせてくれるような設定だった。「自分の思いを手紙に書いて先生に送る」ということも、彼らが得た大きなものだったのではないか。「過去は取り戻せないが、学びはじめたことで取り戻せる未来もあったりする」とチラシ

に書いてあったが、とても印象に残る言葉だ。

感性が試されている

C25 貯金局 上村 登

正月早々、大きな地震に、航空機の衝突と、世間を震撼させるニュースが続いた。年末年始にかけて、我が身にもショッキングな事故が続出した。年末にバグテリーが上がり、入れ歯が壊れ、正月二日には車庫の落雪で、玄関から道路までが雪山になった。危機的狀況を脱し、市民劇場の(当番)二月例会の準備会に出席して、今年最大級の衝撃を受けた。事務局に到着するなり、「二〇二三年の市民劇場賞は何ですか？」と確認した。九月例会『旅立つ家族』だという。これは想定内だった。「一票差で十二月例会『シエアの法則』を聞いて、聞き間違いかと思った。えらく動揺した。私のベストワンは二月例会『最後の伝令』。ダントツだった。年度の最



初に強烈なインパクトを受け、後の作品は、どちらが良かったかの比較であった。最後まで、あの衝撃と感動を超える作品に出会うことはなかった。「最後の伝令」は、何位だったのでしょうか？」への答えが残酷だった。「最下位です。」もう、シヨックで言葉がなかった。せめて僅差で上位というのであれば、救われもしたのと思った。準備会は、シヨックでシドロモドロだった。よほど、しよげていたのだろう。帰りがけに見かねた鈴木さんが、「投票の直近の例会に、

票が入るものなのよ。(あなたには)当番例会への思い入れもあったのでしよう」となぐさめてくれた。自分の感性は正しい方向を向いているのか。今回の市民劇場賞の一件で、不安になった。自分が面白かったり感動することは、ひとりで善がりではなかったか。名作映画を観て、本屋大賞の受賞作を読む。もちろん、市民劇場の演劇を全力で鑑賞する。感性が試されているのだと思う。

### 二〇一三年私の順位

C 36 じゅん植田

新しいパンフレットを貰うと、まず内容を見てチヨット想像します。「楽しいのか・悲しいのか・イライラするのか」、また新しい出会いがあるのかと考えていると、六本全てが良く思える私。でも現実とは違います。観てみないと分からないと思うことが多いこの頃、会議に参加した時に六本のうち一本でも良かったと思えるもの

があれば最高だそうですが、欲張りの私はすべて良かった・楽しかったとか、何か心に残る作品で終わってほしい。良し悪しは個人でも違おうと思うので一概には言えません。皆さんはどう思いますか？ 今年の私の順位 (1)旅立つ家族 (2)罨 (3)最後の伝令 (4)きらめく星座 (5)へたくそな字たち 同(5)シェアの法則

### 演劇はやっぱり面白い

F 09 はなまめ

なんとということか!!今年の大きな計画は「能登演劇堂」で「仲代達矢」の舞台を観るということであつたのだが……。二〇二四年一月一日夕刻から私の胸は張り裂けそうになり、二〇二二年合唱公演後能登を旅した想いが浮かんで消え、現実の被災地、そこで暮らす人たちから、目を離すことが出来ぬ日々が続く。輪島の火災現場で「東京大空襲」の後のよう、と呆然と立ちつくす老人の姿が今も

ふつと浮かんでくる。複雑な思いで二〇二三年旭川市民劇場の例会をふり省る。歌あり、踊りありと賑やかな舞台の二月、五月例会であつたが、戦争に向かう世の中の不安と脅えが流れている作品であつた。「井上ひさし」は「芝居においては一が趣向で二も趣向。思想などは百番目か百一番目位にこつそりと顔を出す程度でいい」と言っていたが、しかし、二〇〇四年「父と暮せば」から始まった私の市民劇場歴は二〇年経つた今もなお深い感動が続き、激高にヒロシマ・原爆、核を言わずとも、心に深く、その恐怖と怒りが湧いて来たと同時に、井上ひさしの作品がいつも気になるのである。「きらめく星座」も笑いの中に背後から軍靴の音で向かって来るような舞台。特に、「新しい戦前」の気配を感じ、多くの人たちに観て欲しいと強く思わざるを得なかつた。どの作品もこんな素晴らしい芝居を観ずして!!と思つた一年であつたが……。特に、九月例会「旅

立つ家族」は運営担当としても、期待は大きいものであった。会場係を終え、座席に落ち着き大きく

深呼吸!!目を閉じて幕明けを待つ。(いつもは「銅鑼」のページを開くのであるが)文化座メツセージの動画の場面を何度か観ていたが、想像以上の二頭の牛のぶつかり合いに圧倒され、息を飲んで前かがみとなって見入る私の手のひらは汗がいっぱい。俳優たちの熱気とまとまりが痛い程伝わってくる。私もステージにいるようだ!!迫力満点の幕明けに熱い熱い拍手を送らずにはいられなかつた。イ・ジュンソプ役の藤原章寛は心のひだを、見事に演じ、方子役の佐々木愛の磨き抜かれた演技とおさえた声に心奪われる。エネルギーあふれる舞台であった。スタンディングオベーションのつながりも忘れられない。今、こういう世の中だからこそ、演劇を創る劇団と観る私たちが一つとなって例会を作りあげていこうと改めて思った二〇二三年であった。二〇

二四年も、すてきな会員たちと、舞台に会えますように……。

### 芝居を観る魅力

E 38 ふるーつ・ばすけつと

大谷淳子

事務局からは、年の終わりからはじめに「この一年のラインナップは揃ってる」とよく聞く。それは、当たらなかつたり、当たらなかつたり、当たつたり、する。二〇二三年の六演目は、確かに粒が揃い、作品のジャンル、物語の内容、役者、と見応えがあつた。ただ欲を言えば、最初の二作は戦争を扱っており、後半の二作はへんな言い方だが、日常もの、というか現代として捉えられる、わかりやすい内容のもの。同じような作品が並んだ感あり。しかし逆に、劇団には申し訳ない言い様かも知れないが、内容がよりわかりやすくなり、比較してみる目がかえって良かったりして、心に残りやすかつたかもしれない面もある気が

する。(まわりくどくて、すみません。)いつも思うのは、「劇団の演劇を観に自分たちが足を運ぶ」というのは「生」を感じに行くのだ。「ライブ」。それは観ている側の、自分たちの状況が、けつこう関わると思う。モノをいう。自分たちの体調が、心境がものすごく関わる。仕事。家庭。学校。その日の用事。急な心配……。しかし、「観る」と決めたからには、その時間を、今、この芝居に集中しよう。役者さんを、舞台を注視しよ

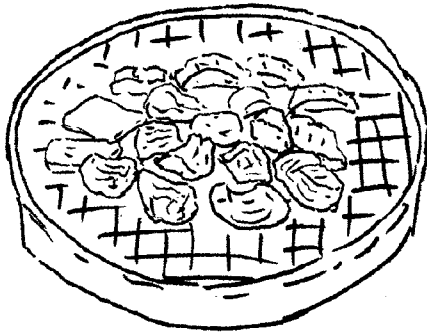
う。限られた時間を、その物語の中で生きてみよう。寄り添ってみよう。感じる気持ちを大切にしよう。それがお芝居を観る魅力と、私は、信じている。

### 二〇二三私の劇評

C 13 あかね ○山〇子

三年前、六〇年以上も住んで皆が顔見知りという穏やかな暮らしから、近くの診療所が閉鎖。行きつけの商店もなくなり、転倒骨折がきっかけになり、ひとりでは暮らせないと決心してこの地に転居してきました。街中の人は近所といても挨拶くらいだよと聞いて覚悟はして来たのですが、たまたま優しいお隣さんで、市民劇場の話聞いて、誘われてお仲間に入れてもらいました。初めて観たのが栗原小巻さんの一人芝居。テレビの向こうの人が目の前で美しい声で……感激でした。次は何だろうと楽しみになり、その日は一寸だけお洒落してお出掛けです。お仲





間の方々のお話もだんだんになって人の和も少しづつですが広がり感謝しています。昨年の感動作は「旅立つ家族」です。戦争に翻弄された若い人達の愛と夢と希望、親子の愛、今もどこかである戦争の悲劇、ニュースで流れてくる子供達の悲しげな目、どうぞこの悲劇が早く終わり、隣人、隣国が仲良くできる世の中になってほしいと、心から思いました。

旭川市民劇場「七月の熱い『畏』」

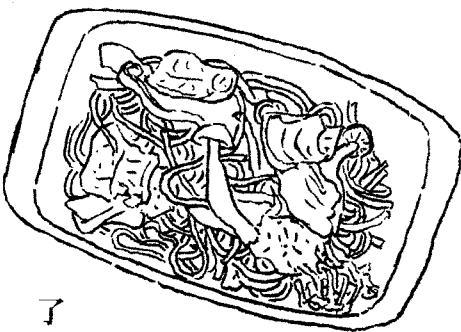
A1 魔術師 大原 慎子

景色が見渡せるガラス張りの玄関が階段上にある、山荘の室内。六人の登場人物のうち一人だけが部屋に居て、他の五人は忙しく出入りする。芝居中程で勢い良く外へ飛び出た赤い洋服の『妻』が窓に貼りつき『夫』を威嚇するようにギャアと叫ぶ。隣の席では『悪女』と呟き頷く私。意気の上からぬ『夫』抜け目ない『神父』、頼りになりそうな『刑事』、叩けば埃が舞う自称画家の『浮浪者』。そして後半には出番が多くないが存在感抜群のドスコイ『看護婦』と全員が名演技。チームワークで私たちを嵌めた。松本裕子演出の巧みさと小田島恒志、則子両氏の翻訳の手腕に喝采だ。銅鑼に挟み込まれたチラシで翻訳者の名を見た時から期待していた。何故ならシェイクスピア戯曲の日本語訳の第一人者、小田島雄志氏の縁りと知ったからだ。この二年程は遅れ

ばせにシェイクスピアその人と戯曲に特別に興味を抱いた年だった。演劇命であった亡夫の書齋に、四〇年以上前に録画したβビデオ、BBC製作『ハムレット』や『ベニスの商人』など数本を発見してのことだ。ディスク化して保存し観ると多くの発見がある。また作者や戯曲についての諸説も読み、退屈と無縁の充実の日々を過ごしてきた。明治大学大学院演劇研究会を率いる井上優氏の文『上演戦略としてのシェイクスピアの翻訳』二〇一一年も読んだ。世界の様々な国の言葉に訳され上演される時、心に沁みる言葉になる事は物凄く大切だ。七月例会『畏』はフランスのロベール・トマ(ロバート・トーマス)作で、翻訳のお二人は英文学者であるが仏語にも強いことの証明だ。「名作が世界の国々でその国の人々の言葉に訳され、観客に受けとめられ、時代と共に育てられ、時代を越えて生活豊かに彩りながら伝えられていく」と言ったのは誰か。パンフレット

トの写真はどなたも皆、お茶目な表情で「畏にかけるぞ」と言いたげに目が笑っている。昨夏の旭川、七月中旬を過ぎてから猛暑日を断続的に体験した。悩み事も抱え穏やかでないとき津軽弁のユーチューバーさんたるすの動画「津軽弁の先生によるフランス語の授業」がポンッとスマホ画面に出た。彼の口調で「かつちやくちやねえ」時にこそ『畏』みたいな芝居を観るべきだ。結末に「わいはー」と驚けば、何をくよくよしてたんだか忘れる「びよん」

二〇二四年一月二四日(水)記



了